

研究活動報告 心理臨床カウンセリングルームとの 共催事業 アートグループ

著者	内藤 あかね
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	10
ページ	99
発行年	2009-03-31
URL	http://doi.org/10.14990/00002671

心理臨床カウンセリングルームとの共催事業 アートグループ

今年度のアートグループは、来年度に向けてグループ運営の方法を改善していく準備を兼ねて、新規募集を積極的に行わず、既存のメンバーによる小規模なグループ活動を続けた。参加年数の長いメンバーは、毎回変わる課題や画材を自分の考えに基づいて自由に使うことに長けてきているので、新しい課題や画材を多く取り入れたのが、今期の特徴である。画材に関しては、たとえば、粘土であればおがくず粘土、鉛筆の製造工程で出る木屑を利用した粘土、樹脂粘土の三種類を使った。描画を行う際にも、通常使用する水彩紙や和紙だけでなく、紙を台紙にするのではなく、コルク板や和紙製の団扇やウレタン素材などを用いてみた。紙以外の素材を描画・着色するときは、アクリル絵の具を多用した。このように多種多様の新しい素材や使い慣れない画材を使うことは、新しい対象との出会いにどう振舞うか、どう対応するかということでもあり、その時間をどう体験するかに創造的かつ現実的観点から見ての意味がある。画材自体が新しくても、課題自体、すなわち粘土造形だったり描画だったりすると、メンバーの制作ぶりを見ても、講師の椋田氏や筆者（フアシリテーター）自身の作品を見ても、基本的にその人らしい作風（描くモチーフの選び方・色調や筆のタッチなど）が繰り返されることが多く、新しい対象を扱う際も、基本的に

はその人の思考や行動の枠組みはそうそう変わらないものだという印象を受けた。

その一方で、画材は慣れ親しんだものを使っても、課題自体の新鮮さが意外な表現を生む場合もあった。「好きな漢字を選んで、そこからイメージを膨らませた絵を描く」という課題では、字の選び方にその人らしさが反映するだけでなく、表意文字として既に意味のある漢字からどのような視覚イメージが展開するかに意外性や面白さが現れた。また、「厚紙や梱包用ボール紙を使った造形」という課題では、過去に試みた課題ではあったが、新しくカラー用紙を加えたために、制作過程で楽しめる度合いが上がったように観察された。

グループ活動に実際参加できるメンバーが限定されていた一方で、健康上の理由で長らく来られなかったメンバーが復帰したり、仕事をするようになってグループに参加できなくなっていたメンバーが、「絵を描く時間ももちたい」と言ってひよっこ顔を出してくれるようなこともあった。このグループのもつ緩やかな共同体的性質が、よい形で生かされたのだと思う。来年度は、グループの運営方法や広報活動のあり方を再調整する年にする予定だが、このような共同体的性質は個人が孤立しやうい時代にあって大切にしたい側面であると思う。

（内藤あかね）